

プレジジョン・システム・サイエンス ③

積極的な拡大

2001年2月、プレジジョン・システム・サイエンス(PSS)は大阪証券取引所ナスタック・ジャパン市場(現ヘラクレス市場)に株式を上場した。現在も上場を維持するバイオベンチャーでは最も早い上場だ。03年9月に実施した公募増資と合わせて38億円を調達。潤沢な資金を得た

PSSは積極的な事業拡大に乗り出すことになる。上場早々、東京都稲城市にあった本社と松戸研究所(千葉県松戸市)を統合し、松戸市の新社屋に本社を移転。01年7月には米、欧に拠点を設立した。02年にはグループの特許出願・管理を担う子会社を設立し、知財戦略の強化も進めた。

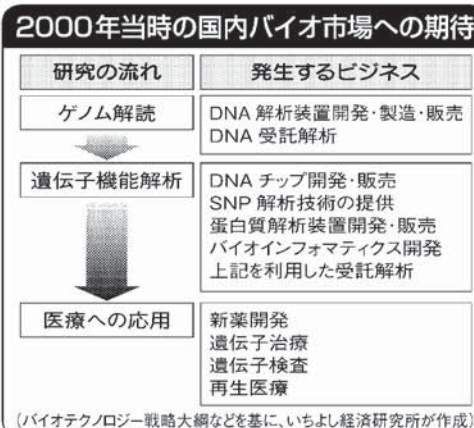
日本の実情

ところが、積極策の甲斐もなく、PSSの業績は上場から数年の間、赤字と黒字の間を行ったり来たりすることになる。主力製品のデオキシリボ核酸(DNA抽出装置のOEM供給A)が増えたことで売上高は順調に伸び、上場から4年後の05年6月期には上場直後の2倍に当たる約32億円を計上したが、田島に言わせると「一ケタ足りない」



先行く見通し、遅れる市場

バイオバブルの中、上場



数字だった。バイオ産業の市場が思うように広がらず、経費が先行する状況が続いた。田島とは10年来の付き合いがある、いちよし経済研究所企業調査部主席研究員の山崎清一は、この時期の田島について「自分が思い

描いていた時間軸と市場のズレに焦りを覚えていたのではないかと語る。山崎は言う。「田島社長は出会った当時から『いずれDNA抽出装置が金調達することもできたのだが、半面、バイオ市場の成長に対する田島の目測を誤らせることにもなった』。ただし、と言葉を継ぐ。『実現には10年かかった』。PSSが上場した前後から、日本ではちょっとしたバイオバブルが起きている。時の小泉政権は「バ

イオテクノロジー戦略大綱」を打ち上げ、00年に約1兆2000億円だった日本のバイオ産業の市場規模が、10年後に25兆円産業へ拡大するとうたった。「『病気の遺伝子が見つければすぐにでも薬ができる』という幻想がはびこっていた」(山崎)。こうした時代の熱気のおかげで、上場時に豊富な資金を調達することもできたのだが、半面、バイオ市場の成長に対する田島の目測を誤らせることにもなった。PSSは08年6月期、販売の見込みが立たない自社製品の評価減や固定資産の減損処理などを実施。業績予想を下方修正し、体制の立て直しを余儀なくされる。

確立した地位

そんな中でも、山崎はPSSの業績がいくら大きく好転すると見込んでいた。「バイオは最初に特許を押しさえれば勝てる世界。PSSはDNA抽出装置で強力な特許を押しさえ、早くにグローバルスタンダードの地位を確立していた」(山崎)。大量生産コストダウンという日本のモノづくり産業の伝統的発想だけでバイオ産業に挑んだ当時の競合他社とは、明らかに違っていた。日本国内の市場が未成熟の中、日本に比べて20年は進んでいると言われた欧米市場にいち早く展開したことも良かった。

09年、日本のバイオ産業の市場規模はようやく2兆4000億円まで拡大した。その中でPSSは、新型インフルエンザの流行を機にいち早く飛躍の時期を迎え、次のステージに向かうこととなる。(敬称略)